

◇談話会要旨◇

シンポジウム「高校地理教育の問題点」

司会 浅井辰郎 教授

大和田 順子 (お茶大附高)

話題提供 上条 淑子 (桜蔭高校)

小池 とみ子 (国分寺高校)

荒井 和子 (中野高校)

池田 郁子 (学芸大附高)

大和田氏の包括的な観点整理に続いて、4人の話題提供者から各自の体験にもとづいた問題提起が行われた。

荒井氏 従来は地理A、Bともに系統地理で必修であったが、48年度から地理A(系統地理)地理B(地誌)の選択学習となった。職業高校の場合、自由な教案が組めるのはよいが、生徒をひきつけることに力点をおかねばならない。現在高校の70%が地理Bを選択している。スライドは喜ぶので古いものだがやっている。

小池氏 全員必修で3単位のBを選択している。教科書が内容的にはもとのまま(4時間分)なのに3時間でやらねばならない。教科書指導要領ともに盛沢山すぎ、授業にあそびの時間がとれなくなった。「特派員報告」などのテレビを活用している。又教科書は一般に科学的・客観的すぎて人間味に乏しく面白くない。また他教科との関連性がないのも問題であると思う。

上条氏 地理の教師の忙しさについて、学校行事である修学旅行や遠足の事前事後の指導、しおりの作成、生徒の分布図作りなど余分な仕事が多い。又教科書の内容が発行の時すでに古くなっているので資料集めは不可欠である。また自信をもって教える為に春夏の休暇は旅行にあてるが、同僚や家庭の支持を得ることが容易ではない。野外調査を取り入れることは、時間割のやりくりや1人で多勢の生徒を指導することが困難などがあって不可能である。

池田氏 商高の定時制は学力も理解力も著しく低く、学園の暴力その他学科の教育より生徒指導

の方が重要である。学芸大附高は大学受験の手段として入ってくる生徒がほとんどであるが、受験指導や補習は行わない。1年生でAを3単位やり3年生で選択でBをとれるようにしてある。能力のある生徒なのでいい刺激を与えるにはどうすればよいかに苦心する。野外実習は1日あてて授業6時間に換算し皇居の外濠一周巡検につれて行っている。

これらの発言に対し参会者から次のような発言や質疑があった。4人単位で自由にグループを組みテーマを与えて1ヶ月の期間で10～30枚程度のレポートを提出させ、提出後すべての生徒に発表させている。地理にあまり関心のない子には系統地理は重複や分断があって理解が困難であり、地誌的なものが入りやすい。授業時間外に地形図の作業をやらせてグループで野外調査をさせる。地理Aには内容に地理でないものが3分の1位含まれている。地図と自然地理と経済地理だけあればよい。また中学と高校の内容に重複が多い。よい副読本がほしい。地理学科卒業生がもっと教員を志望してほしい。

(文責 貝山久子)(1月19日)

オーストラリア・ニュージーランドの

自然と土地利用景観

浅海重夫

日本においてこれまで追求してきた「地形面と土壌型との対応について」の研究テーマを環太平洋地域に広げ、相互の関連性と各地域の特性を考察するために、前年10月～11月に調査したオーストラリア(主として東部)とニュージーランドにおける知見の一部を発表した。

(1) オーストラリア、ニューサウスウェールズ・ヴィクトリア州境のマーレイ川流域一帯の地形面と土壌について。

マーレイ川はオーストラリア大陸の内陸盆地を流れて外洋まで注ぐ唯一最大の水系をもち、東西350kmの範囲に僅々10～20mの比高を保つ平坦な台地面が広がる。流路ぞいに数段の段丘面があり、沖積面の幅はせまく、多くの小支谷は台地を刻む峡谷状をなし、谷壁にバットランド地形の崩壊斜面をみせている。段丘面上の土壌はオーストラリア学派の説くK-サイクル(乾燥期のさく一不安定期一と湿潤期の土壌生成一安定期一の交替)に従った配列をしめし、高位の